モンテッソーリ教育

　　●モンテッソーリ教育に関して、環境について説明

　　　子供は自己教育力を備えているので、大人は子どもを良く観察し、子供それぞれの敏感期に合った環境を整え、提示し自己選択に向かわせる。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　自ら学ぶ

子供は環境を通して成長・発達する。（子ども・環境・教師）

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　提示　　整える

・自己選択する。

　　　　・作業しやすい場の設定。

 ・教具・用具がいつも目に触れるように整え、やってみようとする動機付けに。

 ・教具が本物であること。

　　　　・全体構成をなるべく変えない。

 (秩序の敏感期にあるので決まった場所にあると落ち着き片付けもスムーズ)

　　●職員は環境の一部であるべきとある。どういう事？　利点は？

大人は、自分が環境の一部だと考えると謙虚な姿勢が生まれ、思いに反した行動を取

　　　る事が少なくなる。

　　　子供には自由が与えられ、自分のペースで学び何かを発見する事が推奨される。

　　　何をどの様に行うかを自分で決め、自分の好きなことを追求出来る。

　　　「自律」他からの支援や、援助を受けず「自立」自分の行動を自分の立てた規律によって行える。

　　　子ども主体⇒自主性・自発性が発達する。

　　●『自己選択・逸脱・正常化・集中化現象』の言葉を使いモンテッソーリ教育で言われ

　　　る子供が変わるたった1つの道筋について説明。

　　　整えられた環境から、子供が自己選択し、その活動を集中して何度も繰り返し行う

　　　集中化現象を起こし、周囲が気にならず自分の内面と向き合う事によって正常化

　　　する。(満足感・達成感を味わい情緒が安定し、他者に寛容になり、以前よりも

　　　よくかわる）

しかし身体的基礎が形成される6歳までに、体を形成するエネルギ－と精神

エネルギーが統一出来ない

　　　　・環境が整っていなかった。

 ・周りの大人が急き立てる・ほったらかす・中断する・肩代わりする・先取りする

 と言うじょうきょうにあると逸脱発達し困った状態が現れる。

　　　大人の歪んだ価値観によってゆがめられた場合、良くない状態が現れる事を逸脱発

　　　達と言い、正しい発達の道筋に戻すには自己選択し、集中化現象を起こし正常化をも

　　　たらす。

●手をかけ過ぎない、言葉をかけ過ぎない、待つ事に関して。

手をかけ過ぎたり、言葉をかけ過ぎると

・自分の意志、リズムを見失い投げ出す事が多くなる。

・自分から「やろう」「やりたい」と思わなくなり、してもらうのを待つ様になる。

・心のどこかに諦めの気持ちが生まれ、とことん係る姿勢を見失う。

・思い通りに体を動かせず「不器用」「衝動的」になる。

・不安定になる。

待つ事（３М　見ていてね、待っててね、もう一度するから見ていてね。）

・自分でしようとする意欲を邪魔されず、チャンスを逃さず、待ってもらえることで

安心して自分で考えて行動できる。

【全ての不必要な支援は発達の妨げになる。】

●ご褒美等の条件付きの接し方(陽性強化)のデメリットの説明。

・短期的にしか教育効果なし。

・自己肯定感が持てなくなる。

・親子関係が悪くなる。

・世代を超えて引き継がれる。

無条件の接し方

・子ども全体（理由、気持ち考え方）を大切にし、子供に肯定的イメージを持つ。

・愛情の掛け方をコントロールせず物事を一緒に解決する。

・行動の善し悪しに関わらず、愛情を注ぎ子どもの気持ちに寄り添う。

●褒め方

・褒め方によっては子供に不安やプレッシャーを与えたり、モチベーションが下がる原

因になる。

・成果よりもプロセス（努力、姿勢、やり方）を褒める。

・具体的に褒める。

・質問をする。

【外部的動機付け×、内部的動機付け〇】

●おざなり褒め、人中心褒めに関しての問題点。

・褒められ依存症になる、褒められないと自信が持てず外部からの承認でしか自分の価値を見出せない。

・興味を失う、褒められるだけの行動になり、楽しいと思っていた事にも意義を感じなくなってしまう。

・チャレンジ精神低下、周囲からの評価が下がる事を恐れ失敗を避ける為、チャレンジする事をしなくなる。

・モチベーションの低下、この程度でいいのかと上を目指すことをしなくなる。

●プロセス褒めの利点。

　・結果ではなく、プロセスを褒める事により、自分のことを見ていてくれるという安心感につながり、やる気を起こし、失敗してもまた次に頑張ろうという気持ちになれる。

●ASDについての説明。（自閉症スペクトラムについて）

何らかの要因によって脳に障害⇒先天性疾患

中枢神経機能障害で３歳までには何らかの症状が見られる。

　・特性

想像性、社会性、コミュニケーションに偏りがある。

　　こだわりの強さ。

　相手の表情や感情が読み取れない。

　　見通しが立てにくい（初めての事が苦手、変化への対応が苦手）

バイバイの手のひらが自分の方を向く。

独り言が多い。

オウム返し。

視覚的記憶に優れている。

常動的、反復的な行動。

クレーン現象　　　　　　　　　など

　・クルーズでの対応

　　ぺクスを使って視覚支援（細部に至らず、極力大まかに）。

　　具体的に伝える。

　　なるべく予定の変更をしない。

　　初めての事や変化への対応はあらかじめ伝える。

　　苦手な刺激を避ける（パーテーション、イヤーマフ）。

　　環境を整え、提示し、出来る事を増やし出来た事をしっかりと認め、成功体験を

積み重ねる。

　・使用される薬

　　リスパダール、エビリファイ、レボトミン

●ペアレントトレーニングに関して

　・好ましい行動を増やし、好ましくない行動を減らすテクニック。

（子どもを変えるのではなく、大人が変わる）

　・行動を３つに分ける

　　①好ましい行動⇒褒める

②好ましくない行動⇒スルー（計画的無視：注目を取り除き、好ましい行動を待つ）

見て見ぬふりをする、スルーする

大目に見る、聞き流す、しばらく待つ

☆無視のコツ

　・他の事をする。

　・同時にしている好ましい行動を褒める。

例：乱暴に片付ける。

　　　　　　　　 ↓　　　↓

無視　 褒める

例：「騒ぐのをやめたね」はNG

　　　　　　「騒ぐ」に注目されたと感じるので、次の行動に誘うや肯定的な注目をする。

③危険な行動⇒警告

　・ペアトレの効果

　　好ましい行動の増加

好ましくない、やめさせたい行動の減少

　　目標行動の獲得

　　養育技術の向上

　　ストレスの低下

　　うつ状態の軽減

●PBS適切行動支援について

　・すべての人の選択の自由と尊厳を尊重、インクルージョンを目指す。

　・行動障害を起こす理由を理解し、その理解のもとで支援を行う。

　・生活の質QOLを改善する。

　・行動障害を起こすと推測される原因を気付かせて明らかにする。

　・適切な行動変化が起きるように長期にわたって働きかける。

・クルーズでの対応

　行動をよく理解し、有能な支援を行動障害を起こす人の周りに構築する事により減少させる。

・クルーズでは

　信号ノート、お出かけボード、反応するものの排除、タイムタイマー、ぺクス、

パーテーション、などの対応をとる。